
 ひたすらに

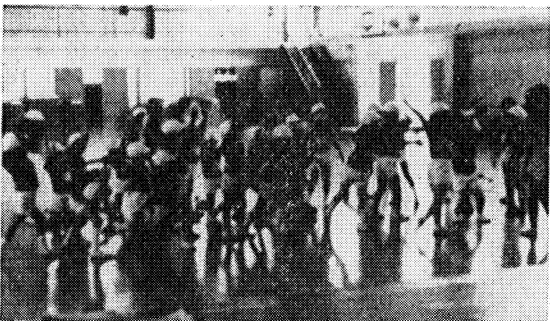


長谷川 寿子

随 想

「先生は 何組の先生？」
 「キョウトウ先生だよ」と女の子。
 「だから 何組の先生？」
 一年生の補欠授業、もうそろそろ終
 わりの時刻である。
 「先生わね。今、自分の組がないの
 よ」
 「へえー。先生は学級先生の方がい
 いな。」
 なるほど、私は、学級担任の方がい
 いと一年生は言っている。私は、この
 子供たちの無邪気な会話にすっかり感
 心し、つい口もとがほころんだ。
 今春からその席につくことになった
 教頭職、まだまだ身につかず、一年生
 にまで学級先生の匂いをかぎつけられ
 てしまった。いや、一年生だからこそ
 鋭く感じとったのかも知れない。でも

私は、その稚い「学級先生」という呼
 び名に担任の先生を信頼しきっている
 やすらぎと、なんともいえない温かみ
 を感じて胸が熱くなった。
 そう、この子供たちは、受け持ちの
 先生を信じきっている。この子供たち
 は、教室の椅子に座った瞬間から、全
 てを先生に委ねている。先生の望むと
 ころ、どんなことでも健気についてく
 る。先生が指示すれば、少しぐらいあ
 きてきてがまんする。
 「さあ、本を読もうね」
 「ハイ」
 「大きな声で歌いましょう」
 「ハイ」
 なんと素晴らしいことだろう。なんと
 恐しいことだろう。そこには、先生の
 姿勢が、鏡のように子供たちの姿に映



みずみずしい子供たち

し出されていく。前向きは前向きに。
 後ろ向きは、後ろ向きに...。
 今の子供たちは、どんな時に心の底
 から緊張するのだろうか。何に向かい合
 った時、自分の力を出しきるのだら
 う。どんなことに会った時、みずみず
 しい感動に包まれるのだろうか。溢れる
 物質文明の中で、自分たちの幸せも不
 幸も気づかないでいるのではないか。
 自然への語りかけも、自分への問いか
 けも忘れてしまっているのではない
 か。こんなことをとりとめもなく考え
 ていた私は、ふと、このことはわたし
 たち教師にもあてはまるところがある
 のではないかという思いにとらえられ
 た。子供の頭脳は、大体四〜六歳で大

人と同じくうちに完成されてくるとい
 う。それでは教師と児童とは頭腦的に
 同程度か。否、全く違う、そこには、
 何ものにも替え難い経験の差がある。
 完成度は同じでも、この経験の差が大
 変重要な意味を持つように思う。つま
 り子供の頭脳とは、経験という材料が
 入ってないコンピューターと同じで、
 いくらコンピューター自体が完成され
 ても、判定材料が入っていないの
 では作動しない。いくら質問しても
 判定材料不足ではいい解答は返ってこ
 ない。子供たちにとってこの世の中は
 未経験、初経験のことばかり。子供た
 ちが一人前の大人になるまでには何と
 多くの関門をくぐりぬけなければなら
 ないことか。それを思うと、私はまづ
 自らに問いかけずにはいられない。
 「今、子供たちに何をしてあげなけ
 ればならないか」「していることは、
 本当にそれでいいのか」「いい授業を
 創り出すための努力を怠ってはいない
 か」と。
 自分の体力や気力とだけ相談するの
 ではなく、子供たちの目の輝き、学ぶ
 心を大切にしたい教育活動をこつこつと
 続けたい。どんな時でも、何歳になっ
 ても、みずみずしい子供たちの前には
 みずみずしくありたい。常に大きな温
 かさを内に秘めていたい。求める心の
 前には、より深く求める心を持ち続け
 たい。ただ、ひたすらに。
 (福島市立福島第三小学校教頭)